まい　あーと■粘土細工「ひめコ」by さとうそのこ

【新連載】

多摩の野草

宮城六郎と自然写真の会

ゴマノハグサ科

オオイヌノフグリ

撮影：宮城六郎

イヌノフグリ

撮影：小野幸男

ヨーロッパ原産の２年草で明治初期に帰化植物として日本に入り、今では人里の春を彩る風物詩になりきっている。春、茎のわきから花柄をのばし、あい色の条をもったるり色の可愛らしい花を付ける。

日本在来の**イヌノフグリ**は、花冠の径は３～４㎜とまことに小さく紅紫の条のある淡紅色の花を付けるが、現在では**オオイヌノフグリ**に追われて、都会地周辺からほとんど姿を消してしまった。**イヌノフグリ**という名は、果実の形から付けられたもので一度聞いたら忘れることはないだろう。

オオイヌノフグリ

イヌノフグリ

ウッディー645

金属のボディからチーク材を使用した木のボディに変身。
ベースはセミファーストというカメラ。

パノラマ360°

カメラ本体下の箱に仕込んだモーターと
フィルムが同調して撮影する仕組み。
誌面中央の写真は日比谷交差点で撮影したもの。

◆えくてびあんレポート◆

創作カメラ個人的博覧会

カメラは「買う」ものとばかり考えている人が多いなかで、カメラは「創る」ものだと考え、
実行している人がいる。川島敦彦さん（錦町）がその人。その着想と技術は並のものではない。
２つのカメラを付けてステレオ・カメラにしてしまうのは朝飯まえで、一回のシャッターで360度が撮影できる特殊カメラまで、
一級建築士の資格をもつ川島さんならではの展開は、眼を見張るものがある。川島さんにとって、まさにカメラは「建築」そのもの。
今月はユニークなカワシマ・ワールドを誌上でお届けしよう。

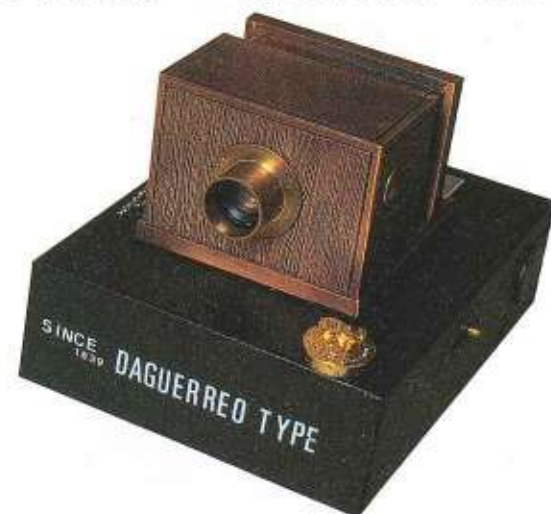
サイコロ・カメラ

"らしくない"遊びゴコロ溢れるカメラ。
二眼式、ファインダー部は着脱が可能。

ステレオ・ペン

２つのカメラを１つに合体させて
つくったステレオ・カメラ。
撮った写真を専用のビュアーで
見れば、立体的に。

ダゲレオ・タイプ

市販された世界初のカメラの置物を
改造してつくられたポラロイドカメラ。

えくてびあんの輪

人がいて、街があります。
あなたがいて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも えくてびあん！

街の明日に響く音

in touch friendship concert '96.Dec.23.mon

立川の街のそここここで、第九が流れる年末の一日。昨年の12月23日多摩社会教育会館に於いて、「ふれあいコンサート」と題された演奏会が開かれた。演奏するのは立川第６中学校の卒業生によって発足した「Ｒ＆Ｂ青少年吹奏楽団」。平均年令二十代前半の若さ溢れるブラスバンドだが、そのキャリアは10年を越える。市の催しものや福祉活動にも積極的に取り組み、演奏以外にもその活動範囲を広げている。これからを感じさせる、この吹奏楽団の“今”の音をコンサート会場で聞いてみた。

足早に師走の街を行く人の姿が目に付くクリスマス前の連休。下は小学生から上は社会人まで総勢約30名からなる吹奏楽団がコンサートを開いた。名前は「レッド＆ブルー青少年吹奏楽団」。おおよそ3分の1が女性というこの楽団、もともとは立川第6中学校のブラスバンド部OBによって結成されたものだという。

「赤は情熱、青は泉町の泉の色からとったものです」と結成時に六中の校長先生につけてもらったという名前の由来について、代表の米山さんは説明してくれた。米山さん自身、結成当時の六中OBの中のひとり。学校を卒業しても音楽を続けていける受皿を、自分たちの手で作ろうとしたことには理由があった。

在学当時、放課後のブラスバンド部を教えるために、わざわざ学校へと通ってきていた人がいた。木曽田さんというその人は音楽関係の仕事の傍ら、当時のブラスバンド部の生徒たちに技術的なことはもちろん、音楽の楽しさや音楽に対する姿勢といったことにいたるまで教えていった。この木曽田さんとの出会いがなければ現在のような活動はしていないだろうと米山さんは語る。その木曽田さんも数年前に亡くなられたという。◆

コンサートのリハーサルはときおり冗談を交えながら、リラックスした雰囲気ではじまった。ピアノ、ドラム、トランペットにトロンボーン、サキソフォンほか大ホールの舞台せましと楽器が並び、吹奏楽団というよりは、さながらビッグバンドといった様相。演奏される楽曲も今回のコンサートはジャズが中心。しかし、普段ジャズを聞かない人たちも、楽しんで聞いてもらえるようなアレンジが施されている。

楽曲選びもジャンルにこだわらずに、時と場所、そのイベントに応じてアニメーションの主題歌を演奏したりすることもあるという。立川で活動するからには「地域の中で聞いてもらう人に喜んでもらえるような演奏をしたい」と語る。

老人ホームへ行ったときには、『水戸黄門』や『大岡越前』のテーマ・ソングを演奏して喜ばれた。◆

本番が始まって、一曲目は誰でも一度は耳にしたことがあるジャズのスタンダード・ナンバー、『A列車で行こう』。会場には楽団員の家族や友人のほか、今回特に力を入れたというポスターを街で見かけてきた人たちがつめかけた。気軽にコンサートにきて一緒に音楽を楽しんでほしいと、入場料は無料。もちろん練習場所代やその他、経費はかかる。今は東京都と立川市からの援助を受けて、残りは楽団員のもちだしでまかなっている。

小学生から社会人までが在籍する“R&B”。練習は毎週日曜日の午前9時から午後の5時まで。今回のような大きな場所でのコンサートは、年に2回。他にも福祉施設や市のイベントなどにも積極的に参加している。

楽団員も立川市だけではなく近隣の市からも、口コミや演奏を聞いて「一緒に演奏したい」と集まって来るようになったという。練習にも常に20名以上が集まるほど。人数が少なくて練習にならないといったことは、今では昔のこととなった。人数が増えたことで出て来る問題もある。10年以上若い青年たちだけで続けてこれたのは、お互いに相手の長所を認めていく“育む”といった気風が根付いているせいかもしれない。

演奏が進むにつれ、しだいにコンサートも盛り上がりをみせて、全員立っての手拍子となった。舞台上で演奏をする楽団員たちと客席とが、聞く側と聞かせる側とに別れることなく、曲を楽しんでいる様子は地元のブラスバンドならではの光景だ。

アンコールの曲が終わると約2時間、演奏していたメンバーたちは疲れた様子もなく笑顔で舞台を降りていった。

現在、楽団では中学校へいって演奏の仕方などを教えるといった活動もしている。

かつて六中ブラスバンド部の生徒たちに向けて奏でられた一つの音が、幾つもの若い音を共鳴させて音楽へとなりはじめている。

お話をうかがった米山さんは今、非常勤の講師として中学や高校で数学を教える傍ら、“R&B”の活動の一環として中学生に演奏の仕方も教えている。その姿は、六中のブラスバンド部に通っていた木曽田さんの姿とだぶって見える。これからどんなものへと形を変えていくのか、たくさんの可能性を秘めながら、米山さんたちの奏でる音の輪はさらに広がりを見せはじめている。

志ん生さんのきせる

㈱立川印刷所会長●鈴木閑郎

四十年前の話である。

一九五四年十月、その年の春、わたしが入学した学校は創立七十五周年に当たっていて、大学祭が賑やかに行われた。

入学してすぐ、落語研究会なるサークルに入会した。当時は略称ラクケンであり、現在のようにオチケンなどという臭い言い方はしていない。

落研では、大学祭の演し物として、講堂で寄席を、地下の小講堂で若手の噺家とわれわれの、寸劇を企画した。若手とは、馬の助（故人）、馬太郎（現志ん馬）、朝太（現志ん朝）、小えん（現談志）、金生（現円楽）などである。

ぶっつけ本番。わいわいがやがや、舞台へ立つ方がすっかり嬉しくなって、大騒ぎである。

学生服のわたしが舞台上手から現れる。朝太が派手な色相の着物姿で、顔に濃い化粧をして下手から登場。オカマに見立てている。妖しげな素振りでわたしに近づき、媚態をつくる。わたしは用意した楊枝を下唇の下にぶらさげて、下手に引っこむ。すかさず、司会者が、「昼下りの情事」と怒鳴る。当時人気を得た、クーパーとヘプバーン主演の映画である。

何のことはない、へぷるさがりのようじで洒落たつもりなのだ。

こんな他愛ない寸劇らしきものを、とっかえひっかえやってお茶を濁した。

さて、寄席である。

講堂の入口にデカい看板を立てた。下手な字で、無論われわれの手作りである。

曰く、ワセダ寄席―志ん生、円生、三木助、小さん、馬の助。小さん以外全て故人になってしまったが、ものすごいメンバーではないか。これに文楽が一枚加われば、数年後、芸術祭賞を総ナメにした、東横落語会そのものである。

師匠方を迎えにいく係を、くじ引きで決めた。わたしは志ん生師を希望したが、はずれ。引き当てたやつを、たばこの〈いこい〉ひと箱で買収し、いさんでその任にあたった。

いつもは乗ったことのないタクシーを、穴八幡の前で拾い、日暮里の志ん生宅まで迎えにいく。

車の後の席に志ん生師とわたし、助手席にはお付きの今松（現円菊）。志ん生師はグレイの角袖、同じ色のソフト帽。ずっと目を閉じて終始無言。わたしもひとこともしゃべれない。なんたって、隣りに大志ん生が座っているのだから、身じろぎもできぬ。ところが、前の今松が実に騒々しい。あの看板の字は下手だの、割れたガラスを早く入れればいいのにだの、あのご婦人の着物の着かたはなってないだの、それこそ際限がない。

講堂の前で車を降りるとき、「おまいはどうしてそうペラペラしゃべるんだろうね。だからいつまでたっても噺がうまくならねえんだ。この書生さんをごらんな、ひとこともしゃべらねえ」志ん生さんがこう言って、手提袋からきせるを一本だし、ご褒美だよ、とわたしにくれた。わたしは、口をとがらしている今松を尻目に、恭々しく頂戴した。

その日、志ん生師は〈鈴ふり〉を熱演し、大講堂が揺れんばかりの大受けをした。

そのきせるは、羅宇の吸い口に近いところに、一升徳利と、志ん生、と焼き印されている。使いこまれ、鉛色のそのきせるは、わたしにとって、何物にも替えがたい思い出である。

一九七四年に生まれた末むすめに、わたしは、志生子、と命名した。

えくてびあんエッセイ●No.48

表紙は語る

まい あーと 粘土細工「ひめコ」 by さとうそのこ

ちょっとユーモラスな形の今回の作品は、昨年11月に開かれたさとうその子さん（高松町）の個展「'96ワイワイ・ガヤガヤ展」に出展されたもの。タイトルの「ひめコ」とは、以前に旅行した北海道で出会った馬の名前。「ひめコ」とのふれあいの中で感じた、言葉にならないものが今回の作品となった。その頃、美しかった紅葉の色をもらって色付けをした。仕上げにはベビーパウダーを使って微妙なふうあいを出している。

作品のテーマは“人”が中心という、さとうさん。その動きや表情をつかんだ作品は、個展を見に来た子供たちが真似をするほどユニーク。その形は、昔の作品にくらべると最近の作品は、ずい分とデフォルメされてきているという。自然な形と色はさとうさん独特のユニークな世界だ。

真如苑だより

寒い日がつづき、つい家にとこもりがちな冬。北風に耳を切られながら街を歩けば、春を待つ草木は着々と芽ぶく準備をしているようです。

暖かな陽の光がさす午後のひと時、真如苑にお越しになりませんか。お待ちしております。

■日時　2月19日㈬　2時〜4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

ウォッチング

貼り紙：ねぎ!?

簡潔にしすぎて、まさに意味不明。羽衣町に突然現れた貼り紙である。地元の人に聞いても判らぬまま尋ね歩くことしばし。「今月は15日に販売します。場所は○○宅の玄関前。㊇（売主）」という意味である。この売主、趣味で野菜を作り始めご近所に配っていたのが昂じて、ついにこのお宅の玄関先を借りて路上販売を始めたのである。判る人だけに伝わればよい広告、さて、その効果はいかほどのものであろうか。

WATCHING

東風

たとえば、寒稽古のような時に早朝、ぬくい蒲団を蹴って、凍てるほどの冷たい空気の中に飛び出すことがある。まだ、お日さまは上がっていない。靴音がいやに大きく響く。周囲に気をつかってゴム底にしたのに◆一番電車に乗る。一輌に五、六人しか乗っていないが、どの顔もある厳しさを宿している。なかには眉間に皺を寄せている人もいる。どうして、皆が皆、おなじ空気をまとっているのであろうか。目的はそれぞれ異なっていよう。ある人は働きにゆくのであるから毎日である。ある人は釣りに行くところである。また、ある人は寒稽古の道場まで電車に乗ってゆく。別の人は、旅行に出掛けるところ◆働きに行く人を除けば、ちょっと日常からはみだした緊張感がある。寒くて眠いが、どこか誇らしいところもあるのであろう。いつもの自分とはちょっと違うんだ、今日のオレは。この充実感は、何にたとえたらいいんだ。日がサンサンと照ってから行動を起こすのとは、雲泥の差である。昨日までの自分をアマチュアとすれば、今日の姿はまさにプロフェッショナルにたとえられようではないか◆なら、以降、ずうっと早起きすりゃいいじゃないか。それが出来ないところが凡夫の悲しいところ。春が近づいてくれば「春眠、暁を覚えず」の候となる、嗚呼◆春眠の覚めつつありてえくてびあん

（編集）池田隆男　小林康史　隅川理　名尾居真　山田恵子　松本わか二　大須賀久典
（写真）天野武男　板橋一明　井上義治　スタジオ269　中村伸　五来孝平

月刊えくてびあん　第151号
平成九年二月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル6F 〒190
電話　〇四二五（28）〇〇八二
FAX　〇四二五（28）一二九七
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

立川昆虫記

7

絵・文　中西　章（若葉町）

①【ナナフシ】成虫
ナナフシ目ナナフシムシ科

②【トビモンオオエダシャク】幼虫
鱗翅目シャクガ科

③【エビガラスズメ】成虫
鱗翅目スズメガ科

①は形も色も枝にそっくりで、見つけにくい。コナラの葉を食べる。②はいわゆるシャクトリムシで、木の枝にまぎらわしい。これに土瓶を引かせて、こわれたので、昔からドビンカケと云われている。幼虫は、コナラやサクラなど多種の植物を食べる。③は木の幹などに止まっていると、中々発見しにくい。①と②は擬態と云う。③は隠蔽色と云い、俗称を保護色と云う。これらは昆虫が外敵から身を守る保身術の一例である。